藤枝市史だより

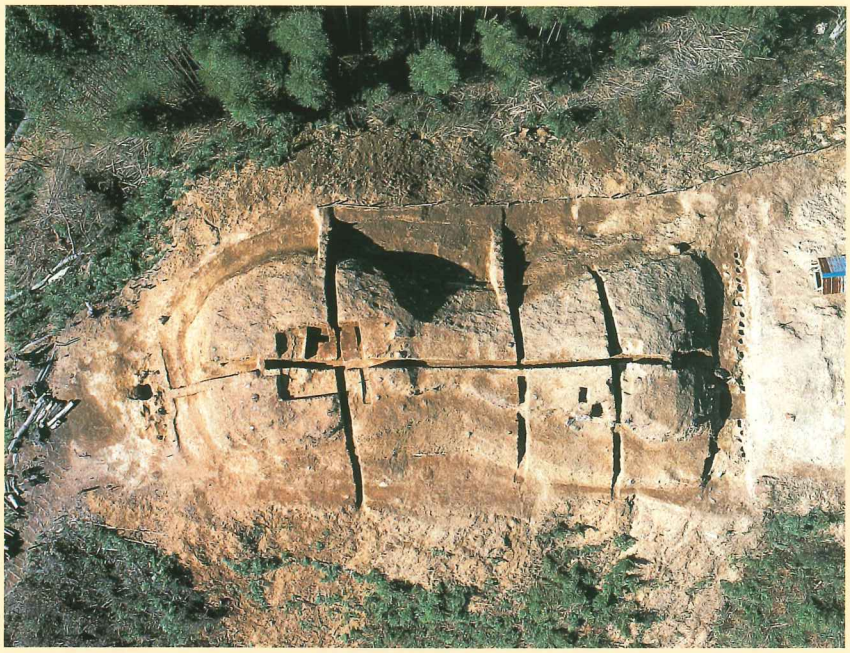
第7号

平成14年10月21日発行
編集・発行 藤枝市郷土博物館
市史編さん係
〒426-0014
藤枝市若王子500（蓮華寺池公園内）
TEL 054（645）1100
E-mail
fujieda-muse@ny.tokai.or.jp

市内高田・観音前2号墳

新発見の前方後円墳

志太地区初の形象埴輪を発掘



ま上から見た高田観音前2号墳（むかって右が前方部）

藤枝市郷土博物館では平成十三年七月から平成十四年三月にかけて、市内高田の観音前遺跡の発掘調査を行いました。調査は第二東名の高田インターと、藤枝バイパスを結ぶ道路（ロングランプ）の計画に伴って行われました。遺跡は、高田と岡部町入野を区切るように朝比奈川に向かって延びている丘陵の先端で、標高約四六メートルのところに位置しています。朝比奈川流域に広がる集落や、市内仮宿・藪田方面を見渡すことができる絶好の地点にあります。市指定史跡「朝日山城跡」と約一キロメートル離れて対面する場所でもあることから、出城など中世の城館に関連した遺跡があると予想されていました。発掘調査を開始するにあたって竹などの樹木を伐採したところ、古墳ではないかと考えられる地形が明らかになってきました。調査が始まって二日目には、埴輪の破片を採集したことから、遺跡は調査前の予想とは違い古墳であることが確実になりました。埴輪は土器と同じような焼物で古墳の墳丘の周囲に立てられたものです。調査が進むとこの丘陵先端部には大きさ三十メートルの前方後円墳（二号墳）、その北側には十三メートルの円墳（一号墳）が築かれていることがわかりました。藤枝市内ではこれまで、市内原にある荘館山一・二号墳の前方後円墳二基が知られていましたが、今回の調査により三基目の前方後円墳の発見となりました。

前方部の北側の周溝には円筒埴輪（筒形の埴輪）が一列に並んで立てられていました。このような埴輪の列が見つかったのは志太地域では大変珍しいものです。円筒埴輪は直径約十五～二〇センチメートル、高さはもっとも高いもので約五〇センチメートルですが、本来はこれよりも高さがあったとみられます。列になっている埴輪の数は二〇本以上、全長約十二メートルにわたっていて、聖なるお墓の空間を示すために立てられたとみられます。このような円筒埴輪のほかに、今回の調査では、鶏形埴輪の頭の部分や人物埴輪の一部がみつかっています。鶏形埴輪は静岡県内での出土が六箇所目という珍しいものです。古墳の墳丘は当時の地表から高いところで約一メートル以上も土を盛り上げて形を整えています。築造当時は丘陵の先端に高くそびえて集落からつねに見上げられたのではないでしょうか。古墳の埋葬施設は後円部につくられていて幅〇・六メートル、長さ二・三メートルの木製の棺が納められていました。棺内に副葬されていたのは太刀一点、刀子一点（小刀）、鉄鏃九点、胡籙一点（矢を入れて腰に下げる容器）で武器類が中心になっていました。古墳の年代は埴輪や副葬品から六世紀初めごろとみられます。

また、前方後円墳の北側に築かれた円墳では、自然の地形を利用して古墳をつくっていて、埴輪は立てられていませんでした。幅〇・七～〇・八メートル、長さ三・三メートルの木製の棺が埋葬されており、棺内に土師器の高坏七点、壷一点、太刀一点、鉄鋌一点が副葬されていました。土器の年代からみて前方後円墳よりも古い五世紀後半ごろとみられます。

これらの古墳は朝比奈川水系を支配した勢力によって造られたと考えられますが、瀬戸川水系を支配した勢力によって築かれたとみられる荘館山一・二号墳をみても、志太地域では古墳時代後期になってから前方後円墳を造るという当時の中央であった畿内地方の文化をとりいれるようになったといえます。このように市史考古編の執筆にむけ、藤枝市の古墳時代を明らかにするうえでたいへん重要な資料を得ることができました。

（考古担当調査委員　岩木智絵）

江戸時代の若者組

近世担当市史編さん専門委員
県立富士高等学校教諭
関根省治

青年団が成立する以前、若者組とよばれる年齢階梯組織があったことはよく知られています。県下でも伊豆のそれは特に有名で、多くの研究成果が発表されています。しかし市域を含む西駿河地域については、民俗学からのアプローチもあまり多くないようです。そこで今回は、市史編さんの史料調査で収集できた古文書から、江戸時代後期の若者組の一端を紹介してみたいと思います。

市域の若者組がいつごろ成立したかは明らかではありませんが、さまざまな問題を起こし記録に残るようになったのは十八世紀末、寛政期ごろからのようです。この時期には幕府も寛政の改革の一環として若者組取締りの法令を出しますので、全国的に若者組の活動が幕藩制的な地方・町方支配に抵触するようになったものと思われます。

まず寛政十二年（一八〇〇）五月、谷稲葉村の「上若者」が同村の「下若者」に一札を差出しています（伊久美光子家文書）。当時谷稲葉村の若者組は上下に分かれていたようですが、内容は上若者のうち四人が村役人などに悪戯したため上・下若者組が相談して彼らを村八分にします。しかしその後、中老（若者組の最高階梯か引退した者）の口利きで彼らを上若者組の独断で放免します。ところがこれが下若者組の知る所となり、相談がなかったということで抗議を受け、これに対し上若者組が下若者組へ詫状として入れたものがこの一札です。ここでは市域の若者組に「中老」が存在し若者組に大きな影響力を持っていたこと、若者組の自律機能のなかには村八分のような重い処罰も含まれていたことなどが注目されると思います。また同家文書の文化七年（一八一〇）の一札では、狂言を行おうとする若者に対し親や中老が禁止を求めるが若者は聞き入れず、結局黙認されます。そのためこれに感謝した若者は、博打や休日の大酒、深夜の大声、寺への無礼などの迷惑行為はしないと誓約しています。このように十九世紀になると若者組の発言力がかなり強まっていたことを窺うことができます。

さらに弘化二年（一八四五）に左車町など藤枝宿九町の年寄（町役人）が下伝馬町問屋・年寄に宛てた一札では、青山八幡宮の祭礼に関し各町の若者が華美を競ったり、町同士で喧嘩などしないよう定めています（「柴田家文書」藤枝市郷土博物館所蔵）。遠国から「振付芸者」などを呼ばないこと、舞台を作り華美な幕など張らないことなども求めていますが、こうした禁止事項は逆にこうしたことが行われていたことを示しているともいえましょう。祭礼は若者にとって最大の自己アピールの場であり、羽目を外すことも少なくなかったのです。

若者組以外にも、江戸時代の民衆の生活を知ることができる史料がいくつか残っています。これらも可能な限り市史の近世資料編に収載したいと考えています。

青山八幡宮遠景

『藤枝市史』別編・民俗の刊行

『藤枝市史』別編・民俗（A5版、口絵二四頁、本文八三二頁）が、市史の第一冊目として、平成十四年春に刊行されました。本書の特色は、本編・特説編・図像資料編の三部構成とし、藤枝の民俗を立体的に理解してもらおうとしたことです。五人の委員が、聞き取り調査を行い、市内の民俗事例を広く紹介しています。藤枝を特徴付けるテーマは、特説編に収録し、詳しく取り上げました。また、図像資料編には、古い写真や絵馬等およそ一三〇点を収録しています。志太地域が合併する動きがある中、藤枝に古くから受け継がれてきた伝承を、後の代に引きつぐために、一家に一冊置いてみたらどうでしょうか。『藤枝市史』別編・民俗は、郷土博物館で定価四、〇〇〇円で販売しています。

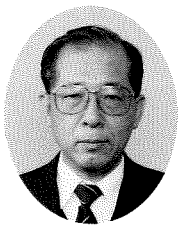
この他、以前発刊した、市史叢書がまだ若干在庫があります。青島村誌は一、二〇〇円。大洲村誌は一、〇〇〇円。葉梨村誌、瀬戸谷村誌、広幡村誌は、それぞれ八〇〇円で販売しています。

近世担当委員の紹介

専門委員
関根省治
県立富士高等学校教諭

近世の藤枝は、城下町と宿場町の二面性を有する町方とそれを取り巻くように存在する村々から成り立っていました。こうした特色を踏まえ、近世資料編は町や村を扱う第一巻と田中藩を扱う第二巻に分けて編さんすることにしました。第一巻は現在編集中ですが、支配文書はもとより、人々の息遣いが伝わるような私文書も積極的に取り入れていきたいと考えています。「江戸時代の藤枝」ではなく「藤枝の江戸時代」を描きたいと思います。

調査委員
壬生芳樹
元県立静岡高等学校教諭



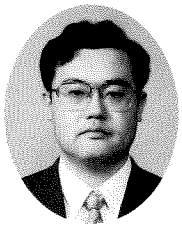
私はこの三月まで高校の国語科教員でした。古典では昔の人々の考え方や喜怒哀楽、素朴な感受性に出会うこと、知ることを大きな喜びとしてきました。今はそうしたことを更に深めるべく、東京の私大の大学院に通って勉強しています。

藤枝市史に関わらせていただいて、改めて昔の人々の文化的な方面での、旺盛な活力を感じています。市史の中に当時の人々の息遣いを留められたらと思っています。

調査委員
大塚英二
愛知県立大学文学部教授

愛知県立大学文学部日本文化学科の教員です。日本近世農村社会全般を研究対象としていますが、なかでも土地所有と融通の関係、地域金融の展開などをより専門的に扱っています。いま最も関心があるのは、頼母子講など金融講の地域ネットワークと金融秩序のあり方で、藤枝市域でもこれを検討したいと考えています。これまで研究のフィールドとして遠州地域に長く関わってきましたが、今後は大井川を挟んだ駿州地域にもより深く関わっていきたいと考えています。

調査委員
塚本裕巳
県立相良高等学校教諭



私は相良高校で地理歴史科の教員をしています。授業では、有名な人物だけではなく、その時代を生きた普通の人々にも光をあてるように心がけています。「藤枝市史」では、災害や新田開発等を担当します。江戸時代の人々が、くらしを守り、くらしをよくするために懸命に生きた姿を掘り起こしていきたいと思います。

区かわらばん版

◎市史編さん委員の交替

編さん委員

新　堀田　良雄（藤枝市文化財保護審議会長）
旧　天野　信直（藤枝市文化財保護審議会長）
新　成島　清（藤枝市自治連合会代表）
旧　小柳津茂助（藤枝市自治連合会会長）

◎平成十四年度の活動状況

古代・中世担当では、平成十五年春の、『藤枝市史』資料編2（古代・中世）刊行をめざして、校正など編集作業を行っています。

考古担当では、平成十二年に発掘調査した、助宗古窯跡（すけむねこようあと）から出土した土器の整理作業を行っています。

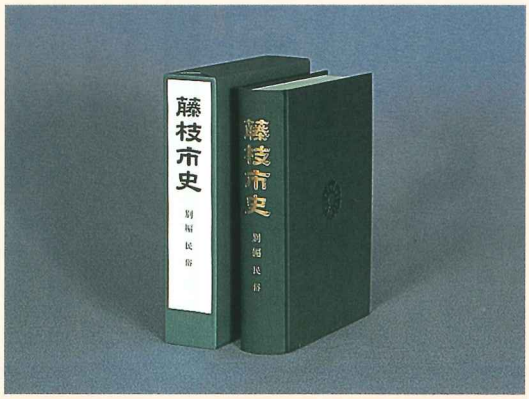
近世担当は、平成十六年春に、『藤枝市史』資料編3（近世一）を刊行するため、古文書の解読を藤枝古文書会会員の方に手伝ってもらいながら進めています。

近現代担当は、藤枝市行政文書の調査を行っています。また、並行して旧農協の資料の収集・調査を行っています。今後とも皆様のご協力をお願いします。

13年度事業の紹介

民俗

『藤枝市史』の第一冊目として別編「民俗」を刊行しました。別編「民俗」は、藤枝の民俗を様々な角度から取り上げるため、本編・特説編・図像資料編の三部構成をとっています。藤枝の地に根づいた様々な行事や生活のあり方、農産業などについて、五人の調査委員が各々の聞き取り調査をもとに執筆を行いました。平成十年度より調査委員が市内各所にて、多くの市民の皆様に貴重な体験談・思い出話・伝承などを聞かせていただいたり、写真撮影をさせていただいた結果がこの本です。別編「民俗」は、調査委員を信頼し惜しみなくお話を聞かせてくださる方々がいて、はじめてその姿を表すことができました。ご協力ありがとうございました。



刊行された別編「民俗」

近世・近現代

近世の本年度の前半期は築地上村杉井家文書などの調査をしました。慶長九年（一六〇四）検地帳、寛永十四年（一六三七、田中藩主水野忠善（ただよし））以来の古文書を所蔵し、驚かされました。後半期は資料編収録候補文書の選定を始めました。

近現代は明治～昭和期の現藤枝市域の各町村の役場文書の調査を行いました。主として議会の会議録、予算、決算書、事業報告です。これによって、当市域の近現代の行政の歩みが明確になると期待しています。

考古

藤枝の鬼岩寺では、これまでに五輪塔をはじめとする中世の石塔が数多く発見されています。平成十一年度以降、それらの石塔の実測調査を行ってきましたが、平成十四年三月には、新たに寺院の周辺測量と試掘調査を実施しました。

また、平成十三年九月に金比羅山公園にある九景寺古墳の横穴式石室の実測調査を行ったほか、考古資料編に掲載予定の遺物を随時実測しています。

鬼岩寺境内の試掘調査風景

古代・中世

平成十五年三月に『藤枝市史』資料編2（古代・中世）の刊行を予定しています。昨年度はその執筆作業を中心に行いました。加えて、古代担当は墨書（ぼくしょ）・刻書（こくしょ）土器に関する補足調査を、中世担当は東京の内閣文庫において戦国期の記録類の補足調査をそれぞれ実施し、充実した資料編の完成を目指しています。